

本格実施から丸3年が経った「総合的な探究の時間」。
現場で試行錯誤が続くなか、
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

年間スケジュール

1年・2年（合同授業）

探究の基礎を身につけ
テーマ設定に取り組む

単位数は2単位。前半は、ICT活用、ロジカルシンキングなど探究に必要なスキルやマインドを学びつつ、大学生とのオンラインセッション、他校の生徒との協働学習などにも取り組む。夏前からは探究テーマを設定するための調べ学習や実践を重ねる。

問題発見・解決の手法を学び
マイプロジェクトを進める

単位数は2単位。トヨタ車体研究所による問題発見・解決プログラムや各種ワークショップを受講しつつ、マイプロジェクトを進める。1年次に続き大学生とのオンラインセッションや他校の生徒との協働学習に取り組む。3月の成果発表会で発表する。

3年

1・2年次の取組を
専門や進路につなげる

1・2年次に取り組んだ探究テーマをベースに、商業科は「課題研究」(3単位)＋「キャリア探究」(1単位)に、普通科は「キャリア探究」(1単位)に取り組む。

School Data

1985年創立／普通科・商業科／
生徒数85人(男子33人・女子52人)／進路状況(2025年3月卒業)
短大2人、専門学校11人、就職9人、
そのほか1人

福山高校（鹿児島・県立）

産官学連携で進める
「福山みらい創業塾」で
地域社会の先導者を育てる

多くの課題を抱えるなか、
「福山みらい創業塾」を立案

鹿児島県立福山高校では、2021年度より、総合的な探究の時間を使った「福山みらい創業塾」を展開。地域とつながり、外部のリソース（人・もの・金）を活用し、「地域社会の先導者」となる人材の育成

を目指している。

福山みらい創業塾を中心となって推進するのが、商業科の折田真一先生。鹿児島県内で教員を務めたのちに慶應義塾大学社会学研究科で教育学を専攻し、2020年度に福山高校に復職した。大学院で学ぶなかで教育における産官学連携の重要性を実感した折田先生は、「これからの社会を生きる子どもたちに必要なのは、自分で考えて自ら行動する主体性。知識・偏差価値主義を脱却し、創造性を育む教育を行うべき」という信念の下、高校でどのような教育を行うべきか、いかにして外部と連携して人材を育てるか、持続可能な仕組みを作るか…を模索していった。

一方、当時の福山高校は多くの課題を抱えていた。まず、特別支援を必要とする生徒や基礎学力に課題がある生徒が多い学校となっていたものの、サポート体制が十分ではなかった。また、光ファイバーなどの通信環境がなかったり、十分な予算がつかず校舎の設備や備品の老朽化が進んでいた。さらに、教職員は非正規雇用



商業科教諭の傍ら、慶應義塾大学SFC研究所
上席所員、文部科学省学校DX戦略アドバイザー、
デジタル庁デジタル推進員なども務める折田
真一先生。

が多く、業務効率が悪く温度差があるという課題もあった。かたや地域でも、急速な人口減少により限界集落が発生するなどの課題が生まれていた。

「できないこと探しをするのではなく、できること探しをして現状を打破していこうと、探究学習をベースにした福山みらい創業塾を立ち上げ、三菱みらい育成財団への応募など資金調達も含めて、産官学連携のスキームの構築に向けて具体的に動き出しました」（折田先生）

地元企業や大学生の協力の下
持続可能な仕組みを整える

「福山みらい創業塾」は、「地域社会の先導者となる人材育成」を目的とし、それを実現するための目標として、「郷土への愛着」「自ら挑戦しようという精神」「問題発見・問題解決の力」の育成を掲げた。「創業塾」としたのは、「創造するだけでなく、ビジネスとして、doすることが大事」という思いが込められている。

「探究学習とは、自分の好きなことを起点に、なぜ？を深めて問いを立て、何のために学ぶのかという価値に気づくためのもの。生徒には、みんなと一緒に正解のない答えを探す旅だと伝え、同時に、探究学習を通して社会に役立てる力、つまり、ビジネスの力を養うことも大事だと伝えていきます。ビジネスというとお金儲けをイメージしがちですが、お金は、ありがとうの対価です。探究のテーマを決めるときにも、自分の興味があること・好きなこと・得意なこと、かつ、感謝されること、



左上：幻の芋とされる焼酎の原材料「蔓無源氏（つるなしげんじ）」を地元の農家さんの指導の下校内で栽培。収穫した芋で「焼き芋シェイク」を制作し、地元のカフェとコラボして販売した。右上：慶應義塾大学の学生がメンターとしてサポート。普段はオンラインでの参加だが、年1回、学生が福山高校を訪れて対面で生徒たちと交流する機会を設けている。左下：フィールドワークの様子。地域の魅力・課題・文化芸術・観光資源を発見するため、公民館、観光スポット、美術館、黒酢メーカーなどを訪れ、地域の人から現場や課題について話を聞く。右下：経済圏を同じくする鹿児島県立曾根高校、宮崎県立都城西高校と探究活動の合同発表会を実施。生徒同士の交流により、将来、共に地域を支える仲間意識を醸成することも狙いの一つ。

担当職員に徹底してほしいこと

- ・目的と目標の区別、問題と課題の区別、分析と解析の区別
- ・Planまでのプロセス（目的・目標・問題・課題の区別）
- ・「WHY思考」の定着
- ・PREP法（結論→理由→具体例→結論）
- ・ガントチャート（行動への道筋と経過確認）
- ・主体性と自主性の区別
- ・ICTを活用したテキストベースでのコミュニケーションとフィードバック（Slack・Gmail・Google classroomなど）
- ・ラーニングピラミッド（他の人に教える・自ら体験する・グループ討論）
- ・すぐに拍手をして全員で認め合う空間デザイン（即時強化・内発的報酬と外発的報酬を意識）
- ・心理的安全性「ストレッチゾーン（ラーニングゾーン）」
 - （1）怒らない、否定しない、腕組みしない、足組みしない、同じ目線と立場で話す。
 - （2）共感と受容→質問→要約
 - （3）「さしすせそ」の徹底（さすが・知らなかった・すごいね・センスあるね・そうなんだ）
 - （4）やらせるのではなく、やってみせる。
 - （5）教えるのではなく、「気付き」を与える。
 - （6）どんな結果であろうと改善のための指標として捉える。
 - （7）「問題がないことが問題」「問題が見えないことが問題」と考えて、行動の成功や失敗を評価として捉えない。
 - （8）呼び捨てにしない「くん・さん」で呼ぶ

成功や失敗までのプロセスが評価対象です

「徹底してほしいこと」として折田先生が探究に携わる教員に共有している資料。「Planまでのプロセス」「WHY思考の定着」「PREP法」から「すぐに拍手をして全員で認め合う空間デザイン」「心理的安全性」まで多項目にわたる。

つまり、誰かの問題を解決するテーマであることを意識するよう伝えています」

福山みらい創業塾のコンセプトや折田先生の思いに共感・協力してくれたのが地元の企業だった。プロバイダ会社の（株）シナプスは通信環境・機器の整備やICT教育に、トヨタ系列の（株）トヨタ車体研究所は従業員をコーディネーターとして派遣して業務改善や探究の指導にと、学校現場のサポートに入った。さらに、折田先生は大学院時代のつながりから慶應義塾大学の大学生に呼びかけ、メンターとして生徒の探究にオンラインで伴走してもらう体制を整えた。

「行政や企業を巻き込んで生徒の探究学習を支えるコンソーシアムを編成し、非営利の社団法人を設立して資金面も含めて持続可能な体制を整えました。また、行政区分を越えて、同じ経済圏である宮崎県都城市の高校や図書館とも連携・協働し、合同発表会なども行っています」

目的と現状から問題を発見し、Whyを重ねて課題を洗い出す

福山みらい創業塾の特色の一つが、学科学年を越えた「異年齢集団」で学ぶこと。1年生と2年生、普通科と商業科の生徒が交じり合い、8グループに分かれてそれぞれの個人探究（マイプロジェクト）に取り組む。各グループは生徒7〜8名ほどで、教員2名とメンターの大学生1名が伴走し、回によっては地域の企業や住民も加わる。各回の報告・振り返り「やったこと（Y）・わかったこと（W）・次にやること（T）」は、チャ

ットツールを使って全体で共有している。

「目指すのは、お互いがもつ知識やスキルを共有し合うフラットな関係性。薩摩の郷中教育の現代版ですね。先生が生徒に教えるのではなく、生徒同士が教え合い学び合う協働的な学習と行動を促し、自ら考えて問題を解決する力をつけてほしいと考え、このような形態をとっています」

グループに分かれての探究活動を軸に、探究を進めるうえで必要なスキルやマインドに関する授業は学年ごとに受講する。例えば、1年次には、ICT活用、ロジカルシンキング、プレゼンテーション、クラウドファンディング、キャリアデザインなどについてワークショップ形式で学び、地域課題を発見するためのフィールドワークにも出かける。いずれも外部と連携しながらの実践だ。

「探究において何よりも重要なのが課題設定であり、生徒にはそのプロセスやロジックを実践的に学んでほしいと考えています。具体的には、目的（あるべき姿）から、目標（あるべき姿を達成するために行動すべきこと）を設定したうえで、現状（現在の姿）を調査・分析します。ここで見えてきた理想と現状のギャップが問題であり、この問題がなぜ発生しているのか、Whyを繰り返して深掘りし、問題に対して改善すべきこと、つまり課題を洗い出します。目的と目標、問題と課題など言葉の定義にはこだわ

り、生徒にもその違いを強調して伝えています。また、結論→理由→具体例→結論という順で話すPREP法や、いつまでに何をやるのかを表にしたガントチャートといった論理的思考・表現のツールも取り入れ、生徒が

使えるようになるようサポートしています」

定性的・定量的に生徒の変化を観察する

探究のテーマについては、「自分の好きなことを起点にする」を最重要視しているが、地域課題発見のワークショップなどを行っていることもあり、地域に関するテーマを設定する生徒が多いという。

「度は絶滅した焼酎用の芋でシェイクを作ったり、Adobeのソフトを活用して高校の看板を制作したり、高校の紹介動画を制作したり、地元の焼肉屋さんの収益改善に取り組んだり。自分が好きな爬虫類の魅力を伝えることを通して社会課題に取り組もうとしている生徒もいます。探究の最大の目的はWhyを突き詰めることなので、アウトプットの手段は問いません。ポスターやスライドの生徒が多いですが、演劇などアートの手法でもOKです」

「結果は現状であり、改善するための指標」と考える折田先生。生徒一人ひとりの評価においては、結果ではなくいかに変化したかというプロセスを評価している。指導要録への記載は定性評価である一方、定量的に観察することも大切にしている。「三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）」による高校生を対象にした調査結果を見ると、主体性や社会性に関わる学習活動、協働性に関わる自己認識や行動、ウェルビーイングなどの項目において、本校の生徒は全国平均や県平均を上回っています。探究の成果は目に見えにくいものですが、確実に変化は生まれています」

まとめ

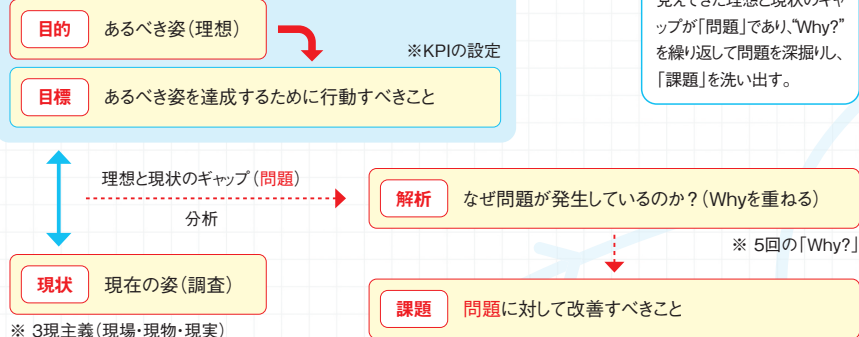
福山高校の探究のモットー

自分の興味を起点に“Why?”を繰り返す
“ありがとう”を生むビジネスの力を養う

#問題発見・課題設定 #外部連携 #創造から創業へ

課題設定(Plan)までの
プロセスを最重要視

課題設定までのプロセス



課題の設定

情報の収集

ここでも現場・現物・現実に触れる「3現主義」を重視。

整理・分析

調査で集めた情報を整理・分析する。地元のお店の売り上げデータなど、リアルな情報を使うのが福山高校の特色。

まとめ・表現

年1回の成果発表会のほか中間発表会や他校との合同発表会など発表の場は多い。アウトプットの手段は問わず、ポスターやスライドの生徒が多いが、演劇などアートの手法でも可。

探究設計のPOINT

POINT ① 自ら考え行動する主体性と
チャレンジ精神を育てる

POINT ② コンソーシアムを形成し、
地域と共創・協働する

POINT ③ 問題発見・解決力が
身につく環境を整える

評価基準

以下の3観点を定量的に評価(評価は毎回の授業で担当教員が1~5の数字でつける)

「知識・技能」

5つのリテラシー: コミュニケーションリテラシー・ロジカルシンキングリテラシー・
シミュレーションリテラシー・ロールプレイリテラシー・プレゼンテーションリテラシー

「思考・判断・表現」

5つのリテラシーを活用してプロジェクトを推進・表現するアウトプット

「主体的に取り組む態度」

実践的に問題を解決に導く力「リテラシー要素」と、周囲の環境と良い関係を築く力「コンピテンシー要素」を縦横の2軸にして評価